Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

# 保育内容・方法及び保育実践の視点から

高　杉　自　子
（子どもと保育総合研究所）

第30回保育学会大会に幼・保・小の関連～教育（保育）内容および方法を中心として～シンポジウムが行われている。この問題は20年経過した今日、必要性と課題性がきわめて大きいのにもかかわらず、保育現場では手つかずの状態であるといっても過言ではあるまい。特に相手方の小学校の関心は皆無に等しい状態の中で子どもたちは進学していくのである。

単的に言えば、小学校は内容理解が中心だからであろう。この問題は幼児教育の特色を表しているともいえる。教科学習ではない総合的な園生活の中で一人一人の幼児のまるごとの育ちをみてきた保育とのギャップでもある。言うなれば、保育実践は内容と方法が密着し、内容が適切でも方法が幼児に適切でなければ幼児の身につかないばかりか阻害する結果にもなりかねない。即ち画一的、詰込み主義、小学校をやさしくした程度の下請けや準備教育ではない。保育方法の理解は難しく相手に通じにくいのである。（教育観と方法）

**1．保育内容の変遷と保育方法**

戦後の保育内容を振返るとき、幼稚園教育は学校教育方法に位置づけられ、学校としての体をなす程に国の示す保育内容に支配されていく。

**・保育内容が幼児の経験であるとした保育要領**

昭和23年、文部省が刊行した保育要領は、幼児の広い生活範囲から「楽しい幼児の経験」として12項目にまとめ、具体的な経験や活動を示した。1日の生活は自由遊びが主体となると述べ、自発性を重視し、具体的な経験や環境調整の重要性が強調された。日課は幼児の生活に応じて固定せず一人一人の幼児の知的、身体的、感情的、社会的に適当な発達を図る大切さを述べた。幼稚園・保育所・家庭を対象として、きめ細かく幼児の生活や活動内容について述べられている。

小学校ではコア・カリキュラム運動が盛んになり、幼児教育にもカリキュラム作りが始まり多種多様な計画が考えられた。この中で自由遊びが学校教育の概念に馴染まず子どもの自発性と教師の指導性についての論争や、保育要領改訂の動きが始まることになった。

**・小学校にモデルを求め、ミニ小学校化へ傾く**

昭和31年、幼稚園教育要領の刊行は小学校との一貫性を図り、教科に直結される内容6領域に望ましい経験が配列され指導計画の作成・運営・改善を打ち出した。6領域は教科とは異なるとされながらも、モデルを小学校に求めた研究、小学校関係の指導者による単元指導計画などが盛んに作られるようになった。これに歯止めをかけて6領域を目標群とし活動の総合性を強調する中で教育課程編成の必要性や評価の問題も加わって、昭和39年改訂の教育要領は告示という形で刊行された。幼稚園教育の振興政策もあり、就園率は保育所と併せて90％を越すが、早教育指向、受験戦争の波にあおられ、領域別画一的集団指導が伝播しミニ小学校化は進む一方であった。昭和50年代中頃より、幼児が減少し始め、保育の質的転換を図ろうとしたが、幼児獲得へ走る状況下、親や社会のニーズの影響を受け、鼓笛隊をはじめ目玉保育が盛んになった。

**・幼児の視座に立つ保育への転換**

幼児を取り巻く環境の変化に対応し、幼児期にふさわしい教育のあり方が検討され、新しい学力観に基づく学校教育改革の一貫として平成元年教育要領が改訂され、幼児期は環境を通じて行う教育を基本に据えた。

遊びを中心とした総合的指導の中で一人一人に応じる指導のあり方、幼児理解、発達論、障害児保育、家庭との連携、保育環境など保育本来の姿を求めて自らの中に保育方法のモデルを見出す方向への転換だった。

**2．現状の問題点と今後の課題**

保育界は社会のニーズに振り廻されやすい。さらに新しい方向の保育では、自由と放任、主体性と自分勝手のはき違い、幼児理解、環境構成、個と集団の育ち特に遊びの状態だけを容認し、遊びの中での育ちや学びへの援助など保育方法の課題は山積みしている。

長年、面一的集団保育に頼り、教師中心の保育に馴れてきた保育者たちが、子どもを中心に据えた保育方法へ転換し、実践の質を高めていくことは重要な課題であるが、まだまだ時間を要するだろう。実践を充実し、実践で証明するより手はないのである。

・子どもにとって遊びの意味と育ち・学びとの関係
・子どもの育ちのとらえ方と保育者の援助
・子どもの育ちと保育環境の関係とあり方
・個の育ちと集団の育ち　集団生活の意味
・実践を生かす保育研究　保育者養成　など

実践を語り合い、実践の省察を深め、自分探しと文化的実践の共同作業を展開していくことが急務である。



NII-Electronic Library Service